

巻頭言

マネジメントという言葉がもてはやされている。宇宙開発は、組織とプロジェクトのマネジメントが特に重要となる分野である。昨年から、世界の宇宙機関のプロジェクトマネジメントとシステムズエンジニアリングをとりまとめる委員会の議長をつとめているが、個々のマネジメントプロセスについては、宇宙機関という組織においても、プロジェクトチームと言う単位で見ても、その置かれた境界条件によって異なるものである。このため、単一の宇宙機関の中でも分野ごとに多様性を有する。一つの組織において多様性を包含する事は、組織としてのマネジメント上の困難を生じ、組織としての包容力を必要とするが、国家や組織において多様性を内在する事こそが、強い持続性において本質的に重要である(例えば、『ローマ人の物語(塩野七生)』、『文明の衝突(S. P. Huntington)』)。

異なる環境に置かれている事から、宇宙機関ごとに必要な役割も当然異なってくる。欧州と米国そして日本では、大学の組織としてのあり方、宇宙予算の考え方、宇宙に関わる企業の實力、安全保障分野における開発の考え方、に大きな違いがあり、ESA、NASA、JAXAでは必要とされる役割が自ずと異なるものとなる。また外的条件は時代とともに常に変化するものであり、それに呼応して行く必要がある。社会の要求に応じて組織の役割を見直して行くことの重要性は、営利企業に限った話では無い。民間事業者では、自分たちが良いと思ったことを続けていても、それが社会から必要とされなくなった時点で淘汰されるというメカニズムが働き、社会的な健全性が最低限担保されるのに対して、単一の宇宙機関においてはこのようなメカニズムが存在しない。

さて、宇宙科学研究所はどうであろうか。宇宙科学研究所がこれまで行ってきたやり方は、世界のどの宇宙機関と比較しても、極めてユニークである。さらに組織としての強みと弱みは常に物事の表裏をなし、一方だけを変化させる事も不可能である。しかし、自らへの問いかけは怠ってはいけないのである。宇宙科学研究所の、これまでの進み方については、例えば田中靖郎先生が2013年のAnnual Review of Astron. & Astrophys.の巻頭言として極めて格調の高い文章を書かれている。

上野 宗孝(宇宙航空研究開発機構・宇宙科学研究所)